

中央大学大学院経済学研究科 News

新任教員紹介～唐成教授(現代中国経済論)

このたび、経済学研究科スタッフの一員になりました唐成です。新任の自己紹介ということなので、主に私の研究内容について紹介したいと思います。

私は筑波大学大学院を卒業後、慶應義塾大学総合政策学部講師(有期)、桃山学院大学経済学部准教授、教授を経て、この4月より中央大学経済学部へ籍を移しました。学部の担当科目は『中国経済論』と『世界経済論』で、大学院では、『経済発展論』と『東南アジア経済論(中国経済論)』を担当しています。

私の専門は中国経済論ですが、主に金融やマクロ経済を研究領域としています。大学院に入った頃、寺西重郎先生の『日本の経済発展と金融』(岩波書店、1982年)を勉強したことがきっかけとなり、中国の高い経済成長についても金融的な側面から解明したいと思うようになりました。私はまず、高度成長を資金面で支える家計部門の貯蓄率がなぜ急上昇したのかという点に興味を持ち、修士論文から中国の家計貯蓄率の要因解明に取り組みました。しかし当時の中国では、統計データがあまり時系列に整備されておらず、結局家計部門の可処分所得や金融資産などのデータを推計することから始めるしかありませんでした。しかし、このような経験を積み重ねることによって、中国のデータの扱いに慣れることができ、後の研究に大いに役立ちました。

また博士論文でも、制度面とマクロ的側面から家計貯蓄率の高さを実証研究することしかできませんでしたが、その後研究仲間の協力も得て、念願だった上海市や瀋陽市などでの家計調査を実施することができました。それらを用いて、個票データによる家計の貯蓄

目的、遺産動機などの研究も試みました。10年後の今、研究室に保管してある原票をたまたに眺めると、彼らの家計行動がその後どのように変わったのかが気になります。

家計貯蓄研究の後、私の関心は、高い貯蓄率を有する家計部門の膨大な余剰資金が、どのような形で実体経済へと流れたかに移りました。そこで資金循環統計から、1990年代における家計部門の資産選択行動や企業および政府の資金調達行動を分析しました。2000年代以降の中国経済は、1990年代に比べてGDP規模が飛躍的に拡大し、リーマンショックも経験したことから、現在制度面のメカニズムの新たな解明が必要とされています。そこで今はこの新しい資金循環分析への取り組みを始めたところです。

もちろん、1978年以降の金融構造の変貌がもたらした金融仲介と金融市場の発達のプロセスも、重要な研究課題でありますから、日本の高度成長にも大きな役割を果たした郵便貯金制度や金融政策を念頭に、中国の郵便貯金制度や政策金融に関する研究も行いました。特に私の郵便貯金制度の研究論文は、当時中国で流行した「郵貯による農村資金吸い上げ論」を逆説的にとらえた論文として、中国社会科学院経済研究所の『経済研究』に掲載され、反響を呼びました。また、国家開発銀行に焦点をあてた政策金融に関する分析結果では、政策金融が機能しないどころか、むしろ地域格差を拡大させたことを指摘しました。いまや中国の郵便貯金や国家開発銀行の改革も、日本と似たプロセスを辿っているのです。

研究会を通じて認識させられたことは、

現代中国金融を研究するうえで、歴史的な視点からの接近も重要な研究アプローチだということです。つまり、現在のダイナミックな中国経済の持続的発展を、過去の推移の軌跡の上に位置づけ、長期的視野でその発展メカニズムを明らかにすることも重要なことです。このような問題意識の下で、私は中国の近代銀行業がなぜ生成され発展したかに焦点を当て、「銀行の役割」と「銀行制度の深化」という二つの切口から、初めて金融史研究に挑戦しました。3年がかりの研究でしたが、清末期に生まれた近代銀行業が民国期を通して工業化に果たした貢献は、通説よりもさらにポジティブな評価をなすべきであろうとの知見を得ました。

この金融史研究を終えた頃、毛沢東時代の金融にも研究意欲が沸きました。通説では、当時の計画経済期の金融の役割は非常に小さく、金融仲介機能も必要とされなかったと言われてきました。しかし、重工業優先発展戦略のもとで、工業化資金を農村に求めるならば、農業生産の拡大が不可欠であり、そのための金融的な機能が必要だったのではないかと思うようになり、現在私はその再評価の資料を準備しているところです。

最近の私のもう一つの関心事は、中国経済の持続的な成長は果たして可能だろうか、またそのための重要な政策課題とは何かということです。おそらく重要な課題の一つは、中小企業に対し成長資金をファイナンスできる仕組みをいかに作るかであると思います。近年私は中小企業への独自調査を行い、まずマイクロデータを用いたリレーションシップバンキング理論による実証研究を進めています。また、企業と銀行のリレーションシップに関する、近現代比較研究への問題意識も生まれました。つまり、異なる時代の企業の資金調達行動において、銀行がどのような関係を保ったのか、その共通点と相違点を明らかにしたいのです。この取り組みでは、中国国内の金融史の研究者と共同研究を進めていこうと予定しています。

もう一つの重要な課題として、中国で為替市場や金融市場などの自由化、国際化が実現していくなかで、経済システムは制度的にどのような対応をしていくべきか、またその政策課題とは何かという点が挙げられます。ただしこれらの研究にはむしろ、日本など他国との学際的な国際比較のアプローチが欠かせないと思います。私にとっては未経験の研究アプローチです。

以上のように、私の研究はまだ発展途上にあり、今後は多くの優れた研究者である同僚たちから刺激を受けながら、より一層レベルアップを図りたいと思っています。中国経済に関心のある方はぜひ私の研究室のドアを気軽に叩いてください。



(大学院科目『経済発展論』の受講生たちと一緒に)